

## グ Ril パルツァーの 保守革命とナポレオン

オットカーとルドルフ一世をめぐって

青地 伯水

Hakusui Aoji

京都府立大学文学部 / 准教授

## I ホフマンスタールの『騎兵物語』と スタンダールの『パルムの僧院』

フーゴー・フォン・ホフマンスタールが、後半生の作品においてオリジナリティーを重視しなかったことは、その作品系譜から明らかである。彼による古典の翻案は、フロイト理論にもとづくソフォクレスの改作『エレクトラ』(1903)、『オイディプス王』(1905)、イギリス中世神秘劇を典拠にした『イエーダーマン』(1911)、スペインのバロック作家カルデロンを範とした『大世界劇場』(1921)、『塔』(1925)など枚挙にいとまがないが、そもそも五幕からなる最初の戯曲『ファールンの鉱山』(1899)からして、E.T.A.ホフマンの短編小説の戯曲化であった。

ホフマンスタールの翻案作品は、戯曲ばかりか比較的初期の短編小説においてもみられる。『バッソンピエール元帥の体験』(1900)に關していえば、ドイツ民族主義・反ユダヤ主義的な新聞『ドイツ国民』において剽窃のそしりを受けたが<sup>1)</sup>、この作品がゲーテ作品に基づくことは、小説末に明示されているのだから、ホフマンスタールの技法は「再話」あるいは「本歌取り」(Kontrafaktur)と呼ぶべきであろう。そして「本歌取り」の技法は、同様に短編小説『騎兵物語』(1898)においても見て取れる。

1848年の一連の政治的な事件の一挿話である『騎兵物語』が、多くを負っているのは、スタンダールの『パルムの僧院』である。スタンダールは、1839年に刊行されたこの小説のなかで、ナポレオンのミラノ入城を描いている。スタンダールの記述によれば、1796年にナポレオンが入城する当時、ミラノを統治していたのは、ハプスブルク皇帝のいとこの大公であった。大公は小麦売買の独占事業

1) Rider; Jacques le: *Hugo von Hofmannsthal. Historismus und Moderne in der Literatur der Jahrhundertwende*. Aus dem Französischen von Leopold Federmaier, Wien-Köln-Weimar (Böhlau) 1997. S.60.

を興そうと、自分の倉庫がいっぱいになるまでは、農民に小麦売買を禁じた。そして、このミラノ入城の際に同行していた、ナポレオンの事績を多く描いたことで有名な画家グロは、「当時流行のカフェ・セルヴィで大公の大事業の話聞いた。彼は黄色いきたない紙に刷ったアイスクリームのメニューを取り、その裏に肥った大公を描いた。一人のフランス兵がその腹に銃剣の一突きを与える、すると血のかわりに小麦がざくざく流れ出るという図がらであった」<sup>2)</sup>。

スタンダーが言及している、グロの描いた、腹から小麦を垂れ流す大公と類似の表現が、ホフマンスタールの『騎兵物語』にみられる。それは、レルヒ軍曹が本務を離れて、昔馴染みの女ヴィーチのしもた屋を訪ねる場面にある。軍曹は門口からなかをのぞき込み、鏡のなかにひげのない男を垣間見て、妄想にふける。このひげのない男は、「政治会合用の暗い園亭をしつらえた怪しげな家の持ち主から、ぶよぶよした巨人にふくれ上がり、その身体に二十個所の呑み口をあけてみると、血のかわりにお金が出てくるのだった」<sup>3)</sup>。

物欲に満ちている男の腹に穴を開けてみると、その欲望の象徴物である物質が、小麦とお金との違いはあるが、こぼれ出すという表現は酷似している。この他にも、馬をめぐる挿話も『パルムの僧院』序盤のワートルローの戦いにつながる重要なエピソードであるが、アントン・レルヒ軍曹が捕獲した馬によって巻き込まれる事件との関連が、指摘されている<sup>4)</sup>。以上2点に類似を認めるのなら、やはり『騎兵物語』の冒頭にも意図的な類似を見出さずにはおれない。『パルムの僧院』はこのように書き出される。「一七九六年五月十五日ボナパルト將軍は、ロジ橋を突破した若い軍隊を率いて

ミラノにはいった。彼らはかくも長い世紀を経た後、カエサルとアレクサンドロスがようやくその後継者を得たことを、世界に知らせたばかりであった」<sup>5)</sup>。

一方、『騎兵物語』の冒頭はこうである。「一八四八年七月二十二日の午前六時前、ヴァルモードン騎兵団の第二中隊、騎兵大尉ロフラーノ男爵を隊長とする百七騎は尖兵中隊として、サン・アレッサンドロの将校集会所を後にし、ミラノへ向かって馬を進めた」<sup>6)</sup>。もちろん、ロフラーノ男爵の中隊もこの後、ミラノ入城を果たすことになる。したがって、この二つの作品の冒頭は、ミラノを占領する軍隊を記述することで始まっている。スタンダーは、ナポレオンにより、ミラノがハプスブルクの圧政者から解放される様を描いた。スタンダーはナポレオン軍に従軍していた経験があり、外交官をはじめ様々な官吏として活躍したが、1814年のナポレオンの没落とともに失職した。ナポレオンの活躍にわが身の栄華を重ね合わせたスタンダーは、ナポレオンをフランス革命理念の普及者とみなしている。

一方、ホフマンスタールは、オーストリア軍のミラノ入城を反動勢力として描いたと見なされている。ロフラーノ男爵の中隊は、ナポレオン軍によって蹴散らされた人々の末裔である。ナポレオンが自由・平等・博愛の伝道者であるとすれば、彼らオーストリア軍は、フランス革命に対する反革命者、反動形成者たちであると解釈される。つまり軍隊によるミラノ入城という同じ表現が、スタンダーとは「意味を反転」<sup>7)</sup>させて用いられているという。

2) スタンダー、パルムの僧院、上巻、新潮社、1951年、12頁。

3) Hofmannsthal, Hugo von:  
*Sämtliche Werke* XXVIII. Hrsg.  
von Ellen Ritter, Frankfurt a.M. (S.Fischer)  
1975. S.42.

4) Rider, a.a.O., S.69.

5) スタンダー、上掲書、10頁。

6) Hofmannsthal, a.a.O., S.39.

7) Rider, a.a.O., S.67.

## II ホフマンスタールと グリルパルツァーとの 『ナポレオン』

しかし、ナポレオンに肩入れしているスタンダールのように、フランス軍の侵攻をそもそも解釈してよいのであろうか。のちには民主政体を否定して、皇帝になったナポレオンを革命理念の普及者にとらえてよいのであろうか。『騎兵物語』が書かれてから、すでに20年以上の歳月が流れてはいるが、ホフマンスタールは1921年5月5日ナポレオンの100年忌に、ミュンヘン、ウィーン、プラハの各紙に『ナポレオン』と題する小論を寄稿している。この中で彼は、7、80年前のヨーロッパの人々が、ナポレオンに共感あるいは反感を抱きながらも多様な想像をめぐらしていたこと、フランス人に限らず、ナポレオンのことをセンチメンタルに空想していたことを指摘している。

ナポレオンが「どんなに極端なまでに反自由主義的であり、それどころかある意味においては自由主義者を軽蔑していたにしても、彼は彼らの憧れの対象であった」<sup>8)</sup>ともいう。もちろん、ホフマンスタールの念頭には、『パルムの僧院』の冒頭の文章も浮かんでいたであろう。『騎兵物語』執筆当時に同じ考えをいっていたかどうかは疑問の余地はあるが、ホフマンスタールはナポレオンが民主主義を拡張する英雄と描かれていることに疑念を呈しており、ナポレオンを革命の普及者、自由と民主主義の使徒と認めていない。それゆえホフマンスタールがナポレオンのミラノ入城と52年後のオーストリア軍のそれを重ねた含意も別様に解釈される。つまり、自由の使徒とするスタンダールのナポレオン解釈の「意味を反転」させて、ホフマン

スタールは48年以降の反動の代表としてロフラーノ男爵のミラノ入城を描いたのだという見解は、ホフマンスタールの政治性を単純化しすぎている。

それではホフマンスタールは、ナポレオンをどのようなにとらえていたのであろうか。ホフマンスタールによると、死後50年を経たころから、センチメンタルなナポレオン像は次第に後退していき、教養のある人々は、分析的にナポレオンをとらえていくようになったという。しかし、ホフマンスタールのようなモデルネの時代を生きた人間にとって、ナポレオンは「イタリアとルネサンスに密接に関係した」(57)、「行動的でかつ神秘的な人物」(59)であると映る。つまりナポレオンは西洋的な意味において、個というものを確立していながら、「運命的なもの(理想的なものではない)と实际的なものの融合」(59)を可能にしている存在であるという。

ホフマンスタールによれば、超人格的な「運命的なもの」をわが身に引き受けたナポレオンは、古代の英雄の末裔であるが、その一方で、同時に彼は「個人のもっとも偉大な実現のひとつ」(59)と呼ぶように、自己を実現しているという点で近代人である。したがってナポレオンは、古代人と近代人をひとつの人格のうちに統合した「ヨーロッパ的巨人の象徴」(59)となる。この統合された人格が、人々の中にある「最奥のヨーロッパ的なものを魅了する」(60)。なぜならヨーロッパ人の最奥にあるものは、「個別のもの、实际的なもの」(60)を「超越と境を接する偉大な計画に従属させる」(60)ことを望んでいるからである、とホフマンスタールはいう。

ナポレオンは、「個としてのわれわれが格闘しなければならない」(60)「全体(das Ganze)をいつも途方もない背景として持って」(60)いるという。個人でありながら、全体との結びつきを失っていない

8) Hofmannsthal, Hugo von: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben*. Prosa IV.

Frankfurt a.M. (S.Fischer) 1966. S.56.

この節におけるホフマンスタールからの引用は、すべて同書からであり、括弧内にページ数のみを示す。

ナポレオンは、「ルネサンスの人々に待望されたもの」(59)の形象化なのである。つまり、ホフマンスタールにとって、ナポレオンは、ルネサンス以来の夢であり、本来背後にあるはずの「全体」すなわち全人格性とも結びつきを失っていない巨人でありながら、フランス革命の自由平等主義を招来する個人を実現した人物である。

ホフマンスタールが『ナポレオン』を新聞紙上に発表したちょうど百年前、1821年5月5日にナポレオンは亡くなったが、彼の訃報がウィーンに住むグリルパルツァーのもとに届いたのは、ようやく7月になってからであった。グリルパルツァーはこの時『ナポレオン』(1821)と題する詩をしたためている。確かに敬愛と追慕に満ちた作品であるが、そこにはホフマンスタールと同じくアンビヴァレントな作者の思いが込められている。

グリルパルツァーは、「そなたを私は愛することができない」<sup>9)</sup>というように、決してナポレオンに称賛の言葉を向けるつもりはなかった。しかしそれでも「そなたは卑小なものに偉大なものを嗅ぎつけた。/償いのために、そなたの墓石に書くがよい/彼はあまりに偉大すぎた、時代が卑小すぎたので」(146)という詩句でこの詩をしめくくっている。グリルパルツァーは、ナポレオンが歴史に残した足跡はおくとしても、ナポレオン個人に対しては肯定的な評価を与え、ナポレオンが生きた時代、つまり自分自身の青年期への強い反発を示している。

ナポレオンが敗退した後、ウィーン会議を経て、復古的なヨーロッパ世界がよみがえる。いわゆるメッテルニヒ体制である。そして当然のごとく、革命が波及する以前の政治体制が反動としてよみがえり、言論の自由は検閲によって相変わらずないがしろにされる<sup>10)</sup>。「暴君とともに暴政が去っただろ

うか/そなたが去った自由な大地に/今再び、自由な思想、意見、言論があるだろうか」(145)。ナポレオンが去った後の世界は、流血がなくなっただけで、グリルパルツァーが称賛できるものは何もない世界であった。

ナポレオンは、本来は革命の子であり、フランス革命の自由・平等・博愛を世界に伝える使者であるはずだった。少なくとも市民階級の多くはそう信じたかった。しかしナポレオンは、理念を貫徹することと自己の征服欲とのあいだにある目的と手段との関係をしだいに転倒させていく。その結果、彼は自らの征服欲を実現するために、平和を破壊し、民衆の生活を荒廃させ、兵士の肉体に傷痕を残し、多くの人命をないがしろにする。「そなたは病める時代の熱であった/病の源を除く使命を帯び/刺激を受けた生により燃えあがった。/だが病の床の不安が/病を熱のせいにするように/そなたひとりがあらゆる安らぎの敵に見え/そなた以前からある罪を担った」(144)。グリルパルツァーは、ナポレオンを決して唯一無比の怪物的存在とみなしはしない。ナポレオンが罪を犯したのではなく、彼が罪深い世界の罪業を衆目にさらしたにすぎないという。それどころか、ナポレオンを病める時代が生み出した一症例にすぎないとまで相対化している。

結果としてナポレオンは、ヨーロッパ社会に負の遺産を相続させてしまった。しかしグリルパルツァーは、ナポレオン個人にしかあり得ない彼の反時代性をむしろ称揚している。「少なくともそなたは、輝かしくあらわれて/我々の裸体の醜い姿に服を着せ、/さもないとおそらく自ら無のなかへと流れ去る/我々の寄木細工の世界に/まだ全体(Ganzheit)、高貴、偉大が考えうると示そうとした」

9) Grillparzer, Franz: *Sämtliche Werke. Ausgewählte Briefe, Gespräche, Berichte.*

1. Bd. München (Carl Hanser) 1960. S. 145.

この節におけるグリルパルツァーからの引用は、すべて同書からであり、括弧内にページ数のみを示す。

10) プロイアー、ディーター、ドイツの文芸検閲史、

浜本隆志、宇佐美幸彦、芳原政弘共訳、

関西大学出版部、1997年、200頁。

(145)。グリルパルツァーは、紐帯を失い部分へと崩壊していく社会の中で、「全体、高貴、偉大」といった時代が失っていくものを、ナポレオンが反動的にもたらそうと試みたことに、郷愁めいた憧れを見出していた。

グリルパルツァーは、ナポレオンを個へと分裂して無にむかって崩壊していく社会に、「全体」という言葉に象徴される個人の全人格性への夢を呼び戻した人物と評価している。個人における全人格性こそ、ルネサンス以来の個人主義がめざす極北である。この点は、ホフマンスタールのナポレオン評価にも受け継がれている。ナポレオンは自己の能力の完全な実現をめざした近代人である。

### III オットカーとナポレオン

グリルパルツァーの歴史劇『オットカー王の幸福と最期』（以下、『オットカー王』と略す。）は、3年にわたっての詳細な歴史研究ののちに、1823年2月12日から3月9日の短期間に執筆されている。しかし当時、猖獗を極めていた検閲のおかげで、『オットカー王』は危うく筐底に眠り続けるところであった。『オットカー王』が検閲によって上演禁止されていた理由は、ひとつにはベーメン人についての表現に差しさわりがあると考えられたからであり、またもうひとつは、このドラマの出来事がナポレオンとオーストリア皇女マリー・ルイーゼとの結婚を連想させたからである。病床にあったカロリーネ・アウグステ皇后が、たまたまこの作品の一部の朗読を聞いて感銘を受ける。皇后の希望にしたがい、フランツ皇帝自らが労をとったおかげで1825年2月19日にブルク劇場で『オットカー王』初演が実現する。検閲によって差し止められていた作品という

うわさも手伝って場内は満員であり、観客の反応はきわめて肯定的で、上演は大成功であった。

しかし、「皇帝は棧敷を立ち去り際に、辛辣な皮肉をこめて皇后に、「今日私たちがこの作品を一緒に見ておいて賢明だったよ。明日にはきっと禁止されているから」といった。」<sup>11)</sup>と伝えられている。実際、検閲当局は、ベーメン人の憤激を恐れるあまり、この作品の称賛記事が「ウィーン新聞」に掲載されることを妨げようとした。ナポレオン戦争を経験したこの時代、ヨーロッパでは民族主義の機運が高まっていた。ドイツ民族の統一を掲げるプロイセンの大ドイツ主義者もオーストリアとの合併を望んではいても、ベーメン人のような他民族をも引き受けることは望まなかった。オーストリアのドイツ人という意識の強いグリルパルツァーのベーメン人に対する感情には、確かに複雑なものがあった<sup>12)</sup>。しかし、ベーメン人が歴史上の名君とみなすオットカーを貶められたと受け取ったのは、彼の意図するところではなかった<sup>13)</sup>。

検閲の対象となったもう一つの理由は、ナポレオンとのかかわりである。グリルパルツァーは、自伝のなかで『オットカー王』の執筆にあたろうとしていた当時のことを回想している。「当時、ナポレオンの運命は、新鮮で誰もの記憶に残っていました」<sup>14)</sup>。そこでグリルパルツァーは、この卓越した人物について彼自身や他の人が書いたものをほとんどすべて一心不乱に読んだが、「決定的な瞬間が広範に散らばっている」<sup>15)</sup>という理由から、ナポレオン題材が詩作にむかないと述べている。

グリルパルツァーは、ナポレオン・モティーフの詩作への不適合を指摘しておきながら、ナポレオンとオットカーとの類似に強い感銘を受けて、詩作の情熱が湧いたことを同時に告白している。「と

11) Grillparzer, a.a.O., S.858f.

12) Politzer, Heinz: *Franz Grillparzer oder das abgründige Biedermeier*.

Wien-München-Zürich (Fritz Molden) 1972. S.171.

13) Grillparzer, Franz: *Sämtliche Werke*.

*Ausgewählte Briefe, Gespräche, Berichte*.

4.Bd. München (Carl Hanser) 1965. S.127.

14) 15) 16) Grillparzer, a.a.O., S.117.



くに二人の運命の転換点が、彼らの最初の結婚の破綻と二度目の結婚とであった事情もあげられる。〔……〕私が『オットカー王』において描こうとしたのは、ナポレオンの運命ではないが、しかしたしかにかすかな類似が私の心を熱くしたのであった<sup>16)</sup>。生田真人が指摘しているように、「私が『オットカー王』において描こうとしたのは、ナポレオンの運命ではない」という表現は、「逆の文意をさらけ出している」<sup>17)</sup>。ナポレオン戦争により神聖ローマ帝国が消滅し、ハプスブルク君主国がオーストリア帝国として生き残った事情に鑑みれば、 Grillparzer がナポレオンの死後に、ハプスブルク君主国の成立のきっかけとなるオットカーの没落を描こうとした政治的意図は明白である。つまりナポレオン帝国は滅んだが、オーストリア国家としてハプスブルク君主国が存続したことへの礼賛が、この作品に含まれていないはずはない。

さらにいえば、そもそも『オットカー王』において描かれている事態は、歴史的事実と照合すれば、オットカーの運命といえるだろうか。Grillparzer 作品においては、オットカーは第一幕における成功と幸福のわずかに二年のち、第五幕において没落を迎えている。その没落の要因は、二度目の結婚と古参の貴族メーレンベルクを猜疑心から処刑したことにあつた。

歴史上のオットカーがマルヒフェルトの戦いにおいてハンガリー軍に勝利を取めたのは、1260年のことである。翌年、31歳のオットカーは、およそ10年間連れ添った20歳年上の王妃マルガレーテとの結婚を子どもがないことを理由に解消し、10月にはハンガリー王ベラの孫娘クニグンデと結婚している。Grillparzer 作品とは異なり、離婚後7年たって、マルガレーテはおよそ60歳で亡くな

る。また、貴族メーレンベルクを処刑したのも1271年あるいは72年のことであり、オットカーがその末裔の手にかかって死ぬのは、1278年のことである。メーレンベルクの件はともかく、離婚とオットカー没落とのあいだには、ルドルフとの争いまでのあいだに13年、オットカーの死とのあいだには18年の歳月が流れているのであるから、因果関係を見出すことはむずかしい<sup>18)</sup>。

むしろ世襲帝政を目指して、ジョゼフィーヌと離婚し、1810年にオーストリア皇帝フランツ一世の娘マリー・ルイーゼをめとったナポレオンのほうが、Grillparzer のオットカーのように第二の結婚を契機に、ロシア遠征の失敗、第六対仏大同盟、民族解放戦争における敗北と次々に武運から見放されている。つまり、この作品で描かれている『オットカー王』の主人公の運命は、明らかにナポレオンの坂を転げ落ちるような没落に近い。

オットカーはそもそもペーメンの世継ぎであったが、しかし連戦連勝の戦果によって、自国を強大化し、第一幕においては、ナポレオンよろしくまるで成り上がりもののように専横に振る舞う。彼はタタル人に向かって、「何のために弁髪があるのだ〔……〕もし私がおまえたちの王であれば、一晩でそれら全部をそらせるのだが」<sup>19)</sup>というように、自らの力のみを頼みとし、他民族の文化に理解を示そうとはしない。オットカーの暴君ぶりを表現するエピソードは少なくないが、同様に第一幕においてオットカーは自国の都ブラハを改造するためにドイツ人の移住を試みる。自己顕示欲に駆られて、自国民の幸福など省みない姿が、ここには描かれている。

しかしGrillparzer のオットカーが、たんに暴君に過ぎないのであれば、Grillparzer が

17) 生田真人、ウィーンの演劇と検閲、郁文堂、2004年、68頁。

18) Enzinger, Stefan: Kausale Verknüpfung der Geschehnisse und Raum-Zeit-Struktur in *König Ottokar*. in: *Jahrbuch der Grillparzer-Gesellschaft* 3. Folge,

Band 20. Wien (Löcker) 2002. S.159-187. S.180.

19) Grillparzer, Franz: *Werke in 6 Bänden*. Hrsg. von Helmut Bachmaier. Band 2. Frankfurt a.M. (DKV) 1986. S.407. 以下、同書からの引用は、括弧内にページ数のみを示す。

この芝居を「哀悼劇」(Trauerspiel)と称する理由があったであろうか。裏返しに言えば、 Grillparzer ツァーがこのドラマを「哀悼劇」と名付けているからには、オットカーを通じて愚かな暴君ではなく、奥行きのある人間像を呈示しようとしたのである。そしてそれは、まさしくナポレオンのような「全体、高貴、偉大」を示す人物ではなかったか。

## IV 近代人オットカーの没落

ふたつの出来事が、オットカーの没落への契機をなす。進退窮まったオットカーは、「おれはわざと不正を犯したことはなかった。/だが一度だけはたしかに、それからもう一度だ、神よ」(503)と後悔の念を述べている。ひとつは、王妃マルガレーテとの離婚であり、もうひとつは、猜疑心のあまり裏切り者と断じた年老いたメーレンベルクの投獄とそれに続く獄死である。これらふたつの行為によって、オットカーは、古参の家臣たちの忠信を失い、離反を引き起こし、皇帝となったルドルフに戦いを挑んだときには、四面楚歌へと陥っていた。挙げ句の果てにメーレンベルクの息子ザイフリートに打ち殺されてしまう。

若いザイフリートは、そもそもオットカーに忠誠を誓い、心服していた。しかし、彼は、オットカー王が世継ぎを欲するあまり、マルガレーテとの離婚を望んでいると耳にするや信じがたい気持ちになる。ザイフリートはハンガリーに勝利をおさめたオットカーのもとで戦ったことに後悔の念を抱き始める。「私のほめるに価する行為や善良な考えは、/あの方とその気高い統治に鑑みてのものだったが、/そのおりにも私とはあまりに大きな落差のために深く恥じ入っていた。/あの方はこのたび私を深く

傷つけた。/私はあの方とハンガリー戦役におもむくべきではなかった」(394)。

しかしカトリック信者であるオットカーには、神の許し、すなわちローマ教皇の許可なしには、離婚は許されていない。それにもかかわらず、彼は離婚からハンガリー公女クニグンデとの再婚へと踏みきる。ユルゲン・コストは、論文「ナポレオン、メッテルニヒとハプスブルク神話とのあいだに」において、この見るものには専横に映るオットカー王の体制秩序に背く生き方に、むしろ肯定的に近代の自律した個人のありかたを見出している。オットカーは「神の意思、伝統、秩序に拘束力があるとみなさない」<sup>20)</sup>、最初のヨーロッパにおける支配者である。

神の意思や王家の権威・伝統をなみするオットカーの支えは、自らの力のみである。彼はそれゆえ臣下に対しても支配力を誇示し続けなければならない。「これまでおまえたちを嘲ってきた国々、/おれは奴らを剣の力で屈服させてきた。/ハンガリーは敗走し、バイエルン侯はおとなしくなり、/オーストリアと勇敢なシュタイアーマルク、ポルテナウ、クライン、ドイツのエガー、/おれは彼らを自分の国に併合してやった。」(411) オットカーは支配を自らの力、「彼の偉大さ、個人的能力すなわち個性」<sup>21)</sup>によって正当化していく。

オットカーは離婚によって神に背いたうえに、さらに神聖ローマ帝国の権威を畏怖することなく、統治しようとする。彼は、支配による自らの裕福という実を取り、神によって権威づけられた皇帝を嘲り、「おれはベーメンの豊かな王であり/おれが貧しい皇帝になるなどあってはならん。」(422) という。伝統的な権威を上回る実力を備えたと過信したオットカーは、神聖ローマ帝国の選帝侯達が自分

20) Kost, Jürgen: Zwischen Napoleon, Metternich und habsburgischem Mythos. in: *Jahrbuch der Grillparzer-Gesellschaft* 3. Folge, Band 20. Wien (Löcker) 2002. S.125-158. S.129.

21) Kost, a.a.O., S.128f.

の前にひざまずくと思いがっており、自らの「胸を叩いて「ここが帝国」」(438)とうそぶく。それゆえに帝国議会の使者の前でも、「おれはこの最高の権力を/最高の品位で飾り/カール大帝の玉座に第二のカールとして/着き、帝国の全権力を掌握することを辞さないぞ。」(439)とオットカーはいう。オットカーには、神の代理人から神の慈悲によって帝冠を授かるという気持ちは、微塵もない。彼は「だが、まずは王冠をおれのもとへもってきて/おれの目の前のこのクッションにおいてくれ」(439)という。目の前におかれた帝冠を自らの手で戴冠しようという、この言葉は、神や教皇の権威を廃し、自らの力の権威化を象徴的に表現している。

ルネサンスを前にした時代に生きるにもかかわらず、オットカーは、神の力による皇帝の権威づけを信じない近代人である。この姿は明らかにナポレオンと重ね合わされている<sup>22)</sup>。ナポレオンは、1804年12月2日ノートルダム寺院での「フランス人の皇帝」戴冠に、教皇ピオ七世を皇帝の権威づけのために呼んでいた。にもかかわらず、「横柄なしかも沈着な態度で、彼は祭壇の上で冠を手にとり、それを自ら、象徴的に、自分の頭に載せたのであった」<sup>23)</sup>。彼は政治的な方便として神を利用することを思いつこうとも、神に畏怖・崇敬の念をいだくような人間ではなかった。この点でも、皇帝ナポレオン一世はオットカーと符合する。

さらにグリルパルツァーは、オットカーの神を恐れぬ所行を、ナポレオンと重ね合わせて描く。ルドルフは第三幕で、オットカーと相まみえて、彼の行為を非難する。「そなたは敵としてザルツブルク大司教の領地へと/攻め込んで略奪と殺人をおこなった。/そなたの民はそこに巣くい/異教徒も恐れるほど残酷であった」(461)。ザルツブルクは、816

年に大司教管区になって以来、大司教が世俗的にも支配する宗教都市であった。その聖なる地を占領し、神の教えにもとる「略奪と殺人」を持ち込むことは、神への信仰と敬意を持ち合わせた人間には、不可能なはずである。オットカーはそれをやったのけた。歴史上、大司教が支配する宗教都市ザルツブルクが占領され、神聖政治が廃され世俗社会に最終的に編入されたのは、1802年のことであり、そのときの征服者はナポレオンであった。

神の名による支配、王家の伝統的支配、個に先立って全体すなわち、共同体の調和が存する封建的支配に対立するのが、近代個人主義社会である。近代個人主義社会は、封建的支配とは逆に、思考する個人を国家や社会という有機的組織の基礎にすえてきた。オットカーは、神の前に自己を一個人として対立させる。彼の戦場における勝利は、自らの努力と才覚によるものであり、それは彼の思考から生み出された。オットカーは、思考を生み出す人間理性のみを頼みとする近代個人主義を代表している。

神や王家の伝統を省みず、自らの思考の偉大さを頼みに築き上げた権力と軍事力とによって、領土を拡大してきたオットカーあるいはナポレオンは、封建的支配にたいして革命的な人間である。しかし結果として彼らは、封建的支配システムにもとづく世界的な規模での共同体の調和と齟齬をきたし、軋轢の前に屈する。ルドルフは、オットカーの勢力がすでに後退していることを彼に認識させ、こう告げる、「神の手を見誤ってはいけない/その手はそなたに聖なる意思が何であるかをおしえてきたのだ」(465)。このルドルフの言葉は、オットカーを神の秩序、封建的共同体の調和に引き戻す。

22) Vgl. Kost, a.a.O., S.132.

23) モロワ、アンドレ、フランス史、平岡昇他訳、新潮社、1957年、463頁。



ツァーヴィッシュのたくらみにより、ルドルフの前にひざまづく姿が家臣の衆目にさらされたオットカーではあるが、それは彼の没落にとって本質的要因ではない<sup>24)</sup>。近代個人主義者としての自己の無限の拡大が、帝国全体をしめるレーン(封土)制という大きな壁にぶつかったことを知ったことこそ、オットカーの真の没落要因である。彼は、自らの軍事力だけを頼みとすることに不安をいだき始める。そしてこの不安は、英雄オットカーの心を蚕食していく。オットカーは、新妻クニグンデを前において、戦争による死への恐怖を語る。「だが、聞いてほしい。新たに戦争という悪魔が荒れ狂い、/新たに国じゅうに血煙があがる。/ある朝、そなたのもとに夫が棺台にのせられて運ばれてくることがありそうだ」(484)。

オットカーは、自己の行為を省みるという点において怪物的人物ではなく、凡庸な近代人である。限界を認識した彼は、過去の偉業をなした自らの力も信じられなくなり、ハンガリーでおさめた勝利すら、「偶然が味方してくれたからうまくいった」(491)にすぎないという。オットカーは、自らの思考を頼みとする個人主義者であった自分を「向こう見ずな痴れもの」(491)と貶める。彼は今や「時のなかで成熟し」(491)、目には見えない何か恐ろしいものに恐れをいだくにいたった。しかし、彼はそれを「偶然」と名付け、まだそれを神の摂理と呼ぼうとはしない。

この恐れをいだいた男は、侍女エリーザベトによって天幕の前に導かれて、王妃クニグンデと佞臣ツァーヴィッシュの逢い引きを目撃すると思いきや、あにはからんや離婚した前王妃マルガレーテの亡骸と対面する。マルガレーテの死を目の当たりにし、オットカーは、神に対する恐れを表明する。

「おまえはおそらく今、神の裁きの椅子をまえにして、/おれを告発し、復讐を叫ぶ。/やめてくれ、マルガレーテ、やめてくれ。/おまえの復讐は果たされた、おまえと引き替えにおれがえたものすべては、/秋の木の葉のように、おれから散り去った」(495f)。もはやオットカーは、神を恐れぬ啓蒙された近代人ではない。彼の内面は、反動化し、死を恐れながら来世における安寧をこいねがう。「おまえはおれをしばしば慰めてくれた、さあ、慰めてくれ。/冷えきった手を伸ばして、私を祝福してくれ。/なぜなら私には感じるものがある、すなわち死だ。/オットカーは今日破滅するだろう。/それゆえ、おまえが祝福されたように、おれを祝福してくれ」(496)。オットカーは、神を恐れつつ、妻のむくろへ向かって、後悔と反省の弁を述べる。

そしてオットカーは、彼を打ち殺すザイフリート・メーレンベルクとの対決を目前にして、ついには神への弁明を始める。「おれはそなたの世界で狼藉をはたらいた。/偉大な神よ、嵐と雷鳴のように、/おれはそなたの沃野をかけめぐった。/しかし嵐を起こすことができるのは、そなただけである。/鎮めることができるのもそなただけだからだ、偉大な神よ。/たとえ悪しきことを望まなかったにしても、/おれは何様だったのか、虫けらか。この世界の主を/思い上がって真似てみせ、/悪によって善への道を探そうとは」(502)。オットカーは、自分がこの世界に混乱を招いてしまったと自覚している。彼は、帝国にもたらした混乱をもはや収めることができない。力によって急進的になした変革は、混乱を巻き起こすだけで、無秩序へといたる。フランス革命の急進性が、ナポレオンの世界征服を推進し、その結果、オーストリアの混迷と衰退とを招いた直後であるだけに、オットカーのせりふは、同時代人に

24) Enzinger, a.a.O., S.175.

25) König, Wilhelm: *Erläuterungen zu Grillparzers König Ottokars Glück und Ende*. 3. Auflage. Hollfeld (C.Bange) S.82.

説得力があった。国王の統治すなわち政治の目的は、「平静、正義、安全」<sup>25)</sup>であるという Grillparzer の認識がここには示されている。オットカーは、自らの所行を後悔し、マルガレーテとの離婚と老メーレンベルクの獄死を「意図的な不正」(503)であったと認める。そして彼は、神に恭順の意を示すのである。「だが、罰を恐れるのではなく、不正を犯すことを/恐れる男の後悔が、御心になうとすれば、/それならそなたのおもての前にひざまずくおれを見てください」(503f.)。

オットカーは、神や皇帝を畏怖することなく、伝統的な権威をも認めず、自己の偉大さによって統治領域を拡大してきた。自己の偉大さが、掟破りであるマルガレーテとの離婚をも正当化した。コストによれば、Grillparzer は偉大さを個人に帰してしまうような考え方に反対であった。なぜなら、一人物の特性、すなわちこの場合、偉大さを個人に帰するというような考え方は、「個々人がよって来る社会や伝統に負うところのものを、すべて否定するから」<sup>26)</sup>である。Grillparzer は「近代個人という意味において自分自身からではなく、全体における役割から、個人は定義されるべきである」<sup>27)</sup>と考えていたといわれている。神を恐れなかったオットカーは、周りの世界との軋轢を感じるも、衝突を回避しなかった。しかし敗北が決定的になったとき、オットカーは、自我をのみ頼みとする近代人の個性を放棄する。彼は反省のあげく、死の予感に恐れおののき、神の前にひざまずき、神聖ローマ帝国のカトリック共同体の前に屈する。カトリック中世共同体が、近代的個人主義の担い手である人物をうち倒したのである。

26) 27) Kost, a.a.O., S.131.

28) Staiger, Emil: Grillparzer: *König Ottokars Glück und Ende*. (1943) in: *Franz Grillparzer*. hrsg. von Helmut Bachmaier, Frankfurt a.M. (Suhrkamp) 1991. S.69-87. S.71.

## V | ルドルフ一世と中世帝国

オットカーがマルヒフェルトの戦いで一敗地にまみれたとき以来、ルドルフ一世は王朝の基礎を確実にし、オーストリア・ハプスブルク朝の始祖となった。それでは Grillparzer は、没落する近代人オットカーにたいして、「万歳、万歳、高貴なオーストリア、ハプスブルクよ、永遠に」(509)とたたえる皇帝ルドルフ一世をいかなる人物として描出しているのだろうか。エミール・シュタイガーは、「皇帝がウィーンを支配する君主になぞらえて描かれていることは明白である」<sup>28)</sup>と述べている。たしかに Grillparzer は、初演でルドルフを演じる俳優ホイアテルから、「なかばは皇帝フランツのように、なかばは聖フローリアンのように」演じようと思うといわれて、「大変けっこうです」とこたえている<sup>29)</sup>。シュタイガーはそれゆえ、「ルドルフの人当たりの良さもまた、フランツのそれであり、話し方、どんなことにおいても民衆の心情を斟酌し、それを正当に判断するすべを心得ている作法もまたフランツのものである」<sup>30)</sup>と断じている。

しかし、ルドルフ像は、あくまで「なかばは聖フローリアン」のようであって、皇帝フランツ一世と同定することはできない。むしろ、武運を司るオーストリアの守護聖者フローリアン像が、ルドルフのなかにあることは、見逃せない。つまり、ルドルフ像を分析する場合には、彼のなかにある聖人像に注目しなければならない。

すでに第一幕において、オットカーを前にして、対比的にルドルフの聖伝説が語られる。選帝会議の使者は、ルドルフに、「あなた様は以前バーゼル近郊の森の中で、/病人を慰めるために/秘蹟の品を身につけて、/アール川の激流のために足止めを

29) Grillparzer: *Sämtliche Werke. Ausgewählte Briefe, Gespräche, Berichte*. S.126.

30) Staiger, ebd.

くい、岸辺をさまよう司祭に/川を渡れるように自らの乗り馬をお与えになったことが、おありではないですか」(421)と尋ねる。この使者こそが、当時の司祭であった。司祭の本務を成就させるために馬を提供するだけでも、ルドルフの敬虔な信仰を認めるには十分であろうが、ウィーンの観客は、このせりふを聞けば、当時オーストリアでとても人気があり<sup>31)</sup>、誰もが知っていたシラーのバラード『ハプスブルク伯』(1803)を思い浮かべた。

シラーのバラードでは、ルドルフのアーヘンにおける戴冠後の祝宴が描かれている。ここに見知らぬ歌人がやってきて、上述の使者と同じ内容の挿話をうたう。シラー版では、翌日、まだ誰とも明らかになっていない伯爵のもとへ、当の司祭が馬を返しに来る。しかしこの伯爵は、その馬を神に仕えるために用いてくれるよう譲り渡す。そして彼はその馬を、「名誉、レーン(封土——筆者註)としての地上の財産、肉体と血、魂と息吹、命を頂いた」<sup>32)</sup>神様に差し上げたのだという。そこで歌人はルドルフをたたえ、ルドルフの六人の娘によるハプスブルク家の繁栄をうたう。ここにいたって伯爵が、かつてのルドルフの姿であり、この歌人が司祭であったことが明らかになる。シラーの詩を予備知識として知っていれば、『オットカー王』における使者とのやりとりが、ルドルフの敬虔なキリスト教徒としての聖人像を表現していることは明白である。

このシラーの詩と『オットカー王』とにおいて描かれているルドルフ像の共通点は、この聖性だけではない。すでに上記の引用にあげたように、シラーのルドルフは、神のたまものとして、「名誉」、「肉体」、「魂」、「命」などと並んで「レーンとしての地上の財産」をあげている。一方、『オットカー王』第一幕において、オットカーの妃マルガレーテとの

対話におけるルドルフを見てみよう。バーベンベルク家のマルガレーテは、新婚の貢ぎ物としてオーストリアとシュタイアーの領土をオットカーに差し出した。離婚に際して、しかしオットカーは、これらの土地を返そうとはしない。マルガレーテが土地を取り戻したがついているのを見て、ルドルフはいう「お考えください、それらの土地は、帝国のレーンです。/帝国にとってみれば空き状態で、あなたのものだというわけでもない」(406)。ルドルフはこの当時まだ神聖ローマ帝国の皇帝ではなく、スイスの一領主にすぎない。オーストリアとシュタイアーが帝国に帰したからといって、彼に何らかの直接的な利益が生じるわけではない。にもかかわらず、彼は、神からのたまものであるレーンの正統性を疑わない。つまり彼は、レーン制の信奉者としてここに描かれている。

また、神に向き合う態度もルドルフは、オットカーと対照的である。ルドルフは「皇帝への高挙の声が私に向けられたとき、/そのような幸せを夢みたことのない私の/低いこうべに世界の主が、/突然、帝冠をすえられたとき」(462)というように、彼は神の慈悲としての帝冠を進んで教皇から受け取る。つまり、彼は神を信じ、教皇の権威を認めている。

そして戴冠後のルドルフは、もはや以前オットカーが知っていたルドルフでもなければ、「ハプスブルクでもなければ、ルドルフですらない」(462)という。「この血管には、ドイツの血が流れ、/この心臓ではドイツの脈が拍っている。/死すべきものを私は脱ぎ捨てた。/私は不死の皇帝に過ぎない」(462)。こうして帝位についたルドルフは、オットカーのように玉座を守るために権力と軍事力を誇示し、戦争に勝ち続ける必要はない。なぜならルド

31) König, a.a.O., S.26.

32) Schiller, Friedrich: *Nationalausgabe* 2. Band  
Teil I. Hrsg. von Norbert Oellers,  
Weimar (Hermann Böhlaus Nachfolger) 1983. S.279.

ルフの支配が正統であるのは、彼の個人的資質とはかわりなく、「超時代的な制度」<sup>33)</sup>に基づいているからである。彼は、ローマ帝国に遡ることができる帝冠を教皇から授けられた、神聖ローマ帝国の皇帝である。ルドルフはこの制度に仕えるとともに、この制度と神秘を通じて一体化し、近代人ルドルフの個性を放棄し、「神によって望まれ定着した秩序」<sup>34)</sup>を維持するよう務める。

したがってルドルフの戦争は聖戦である。「さあ、前進だ、神とともに。そしてキリストが合い言葉だ/[……]/バーゼルの司教様が先頭に立ち、/私たちのために戦の歌をうたい始める、マリア、純潔の乙女と」(499)。ルドルフの戦争理念が、ここにはっきりとキリスト教とりわけ「マリア」に代表されるようにカトリック性を帯びたものであることが強調されている。<sup>35)</sup>

以上から明らかになったルドルフ像を要約すると、彼は聖人のように聖性を帯びた人物であり、その一方で封建制全体の基礎になるレーン制の信奉者である。さらに神の慈悲として教皇から帝冠を受け取り、カトリックの信仰を肯定し、神によって望まれた帝国を維持することをめざすのである。これは「中世的なORDO思考の表現」<sup>36)</sup>と呼ぶにふさわしいヴィジョンである。

このヴィジョンは、ナポレオンが流布させようとしたフランス革命の原理すなわち民主主義や市民的自由と対蹠的にある。それどころかマリア・テレジア、ヨーゼフ二世の流れをくむ啓蒙専制君主としてのフランツ一世のありかたに鑑みても、1823年にグリルパルツァーが呈示した理想的君主ルドルフ像は、かなりの時代的な逆行が見られる君主像である。啓蒙主義的人物で、立憲君主主義者であると考えられているグリルパルツァーがなぜこの

ような理想的君主像を描いたのかを解明することは、今後の課題である。

グリルパルツァーはオットカーに託して近代人ナポレオンを描き、彼の死をもって近代の没落を描いた。ルドルフはいう。「世界はわれわれみなが生きるためにここにある。/そして偉大なのは神のみである。/地上の若き日の夢は夢みられ、/巨人や竜とともに/力づくの英雄の時代は過ぎ去った/[……]/われわれは新時代の入口にいる」(466)。ナポレオンの没落は英雄時代の終わりであり、ここに現れるのがハプスブルク家による秩序世界であると、グリルパルツァーは時代の流れを解釈する。

秩序を破壊する近代個人主義から、「神によって望まれ定着した」ハプスブルク家による秩序世界へというこの歴史の展開図式は、本論の冒頭に論じたホフマンスタールの『騎兵物語』の冒頭を想起させる。スタンダールは、『パルムの僧院』の冒頭でナポレオンによるミラノ入城を描いたが、ホフマンスタールはその同じ場所にハプスブルク反動としてのロフラーノ男爵の中隊を配してみせた。しかしホフマンスタール自身はハプスブルク支配を反動と考えているわけではなく、普遍的なハプスブルク支配の復活の表現として描いた。『騎兵物語』が書かれた1998年には、どんなに政治的に揺らいでいようともオーストリア帝国はまだ存続していたのである。

ホフマンスタールがナポレオン支配の過ぎ去ったのちにハプスブルク支配を描いたように、グリルパルツァーもまた、二つの「新時代の入口」つまりオットカーの死後とナポレオン没落後にハプスブルク家の支配を描いている。グリルパルツァーのハプスブルク世界像は、ローマカトリック教があまねく支配する中世的なORDO思考に支えられて

33) Kost, a.a.O., S.134.

34) König, a.a.O., S.72.

35) Hoffmann, Birthe: König Ottokar und kein Ende. Zur Anthropologie Franz Grillparzers in: *Jahrbuch*

*der Grillparzer-Gesellschaft* 3. Folge, Band 20. Wien (Löcker) 2002. S.188-220. S.206.

36) Kost, a.a.O., S.136.



いる。グリルパルツァーが敵対したのは、ナポレオンの支配であるが、中世世界にユートピアを見出しているという点は、ホフマンスタールがいうところの保守革命と符合する。グリルパルツァーもルネサンスや宗教改革以前の世界へ回帰する中世的なORDOを理想としたのである。

## Grillparzer's Conservative Revolution and Napoleon

Hakusui Aoji

This paper aims at clarifying Grillparzer's political view in *King Ottokars Lucky and End*. Grillparzer is generally regarded as a liberalistic constitutional monarchist under the influence of the Enlightenment. However, he is neither liberalistic nor constitutional in this work.

In the 13<sup>th</sup> Century, the king of Bohemia Ottokar II is defeated in the war against the Emperor Rudolf I and dies. The hero Rudolf, who worships the Roman Catholic Church and is a Feudalist based on the *Lehn* system, becomes the founder of the Hapsburg Monarchy.

Grillparzer, who finds similarity in the lives of Ottokar and Napoleon I, describes Napoleon's life in this drama. After the death of the modern individualist Napoleon, who trusted solely in his talents and endeavors in the continual pursuit of victory, the Hapsburg Monarchy remained firmly in Austria. In 1823, after the century of the Enlightenment, it is the medieval order ORDO that Grillparzer praises. In the view of Grillparzer, who describes Rudolf as an ideal emperor, the Hapsburg Monarchy should rely on medieval faith and domination.

Because he finds his Utopia in a world before the Renaissance and Reformation, he is considered a Conservative Revolutionist such as Hugo von Hofmannsthal who lives in the *fin*

*de siecle* and hopes for the eternal domination of the Hapsburg Monarchy.